

2. 知事のあいさつ

高知県知事の尾崎正直です。今日は皆さん、「対話と実行」座談会に参加をしてくださいます。本当にどうもありがとうございます。

室戸高校は総合学科ということで、いろんな活発な活動しておられる学校だと伺っています。野球部の甲子園での活躍や、まんが甲子園での活躍は、多くの高知県の皆さんがご存じだと思います。さらに、「610 club (室戸クラブ)」を立ち上げ、室戸を元気にしようという活動をされたり、また、総合学科の特徴を生かして、福祉、工業技術の分野で個性ある取り組みをしておられると伺っています。

私から今の高知県の状況と、それに向けて全体としてどういうことに取り組んでいるのかについて、お話をさせていただきたいと思います。

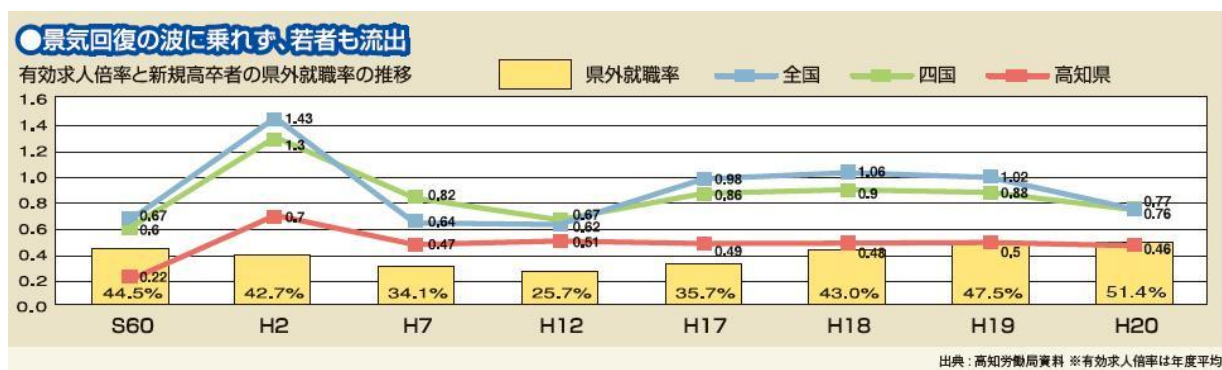
今、高知県全体、高知県庁として一生懸命取り組みを進めようとしていることは、大きく言うと三つあります。一つは、経済を元気にしようとする取り組み。そしてもう一つは、福祉の充実を図ろうとする取り組み。そして、三つ目が教育の改革をしようという取り組みです。この三つが大きな柱ということになります。

あわせて、これを成し遂げていくために、基本的なこととして、道の整備をしたり、さらには、南海地震対策を進めたりと、一生懸命取り組んでいるところです。

【経済の取り組みについて】

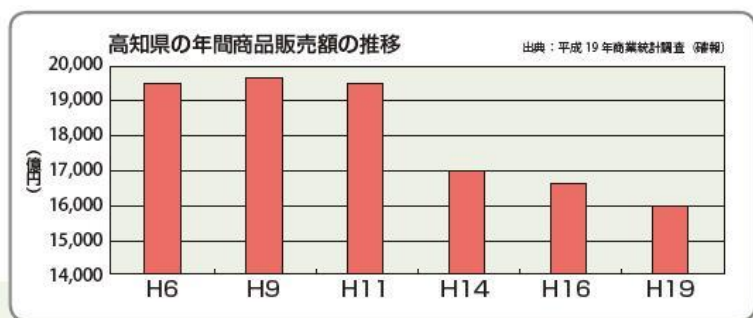
[高知県産業振興計画](#)の最初のページを開いてください。

高知県の経済、非常に今、苦戦をしています。大変な苦しい状況がずっと続いています。この折れ線グラフ(次ページ上段)があるでしょう。これは高知県の有効求人倍率の推移、流れを表したグラフです。1人の求職者に対して求人数がどれだけあるか。就職先がどれくらいあるかを表しているグラフです。平成12年くらいから平成20年くらいにかけてを見てください。



このオレンジ(高知県)の折れ線グラフと、青い(全国)の折れ線グラフを見てもらうとわかりますが、全国の方の折れ線グラフは、平成12年から19年ぐらいにかけてずっと上向きに上がっています。だけど、高知県は上に上がらないまま横ばいになっているでしょう。高知県は1人に対して0.5くらいしか仕事がないという状況がずっと続いてきたんです。

●高知県の年間商品販売額は大きく減少



もう1つ、高知県の年間商品販売額のグラフ（左）をご覧ください。これをご覧いただくと、平成9年の時、高知県で売れた商品の金額は2兆円。それに対して平成19年は1兆6000億円ぐらいしか物が売れてないということが

わかっていただけだと思います。

これはどういうことかということ、経済の規模がこの間に2割も縮んだということです。普通は、経済の規模というのは年を追うごとに大きくなっていきますが、でもこの高知県においては、平成9年から平成19年まで2割も経済の規模は小さくなりました。

どうして小さくなったかということ、人口が減ったからです。もっと言うと、働く人の数が減ったから。人の数がどれくらい減ったかということ、平成2年には高知県の人口は84万人いましたが、今では77万人を切るぐらいまで高知県の人口は減っています。仕事をしている年代のことを生産年齢人口といいます。15歳から65歳くらいまでの年齢の人口は、2割ぐらい減っています。仕事をしていて、そしてお給料を稼いでくる年代の方の人口が2割減っているの、概ね人々が稼いでいるお金も2割ぐらい減っています。だから、商品を買ってくれる人の数も2割、商品の売り上げも2割ほど減っているというのが今の高知県の現状です。

これはものすごく深刻なことです。経済というのは、景気が良くなったり悪くなったり、海の波のように上がったり下がったりするのが普通です。だけど、高知県の場合はそうではなく、人口が減り、経済の規模も縮んでいくということがずっと続いているのが、現状です。

この室戸でも、大幅に人口が減っています。高知県で全体として減っている数は、7%から8%ですが、室戸はもっと減っています。他の中山間地域、他の地域ではさらに減っているところもあります。そういうところでは足元の経済規模がどんどん小さくなっていきます。

これに対して、高知県産業振興計画というのを作って、今、一生懸命やろうとしていることは何なのか。一言で言うと、地産外商ということをやろうとしているところです。足下の経済規模、自分達の周りの経済がどんどん小さくなる。そういう時に、自分達の周りだけに縮こまってしまっているのは、明らかにジリ貧です。田舎だから、どんどん経済規模が小さくなっているところだからこそ、外に打って出て行って外からお金を稼いでくるということを必死になって考えなければいけません。

地産地消というのは、地場のものを地場で売り、自分達が買うものは基本的に地場のもの

のを買いましょうという活動です。これもすごく大事です。でも、足下の経済の規模が小さくなっているの、これだけではいけません。田舎ほど外に打って出て行って、外からお金を稼いでくるということを、必死になって考えないといけません。そのために、今、県全体として地産外商をやろうとしています。

ニュースで盛んに、東京のアンテナショップなどについて取り上げてもらっていますが、あれも、高知のものを東京に持って行って売り込みをかけ、そして、外からお金を稼いで来ようとする活動です。

ただ、この地産外商を進めるということは、実際にはものすごく難しいことだと思っています。なぜなら、高知県の物を東京で売ろうとした時に、ライバルはたくさんいます。全国のいろんな県、いろんな地域が同じことをしようとしています。

東京は、日本の物だけではなく、世界各国あらゆるところからやって来たものであふれています。例えば、高知県産の木で作ったおもちゃが、東京に持って行ったら売れるかという、東京にはノルウェーやスウェーデンの木を加工したおもちゃが輸入され、山のようになっています。ですから、並みの努力では地元の木を加工して持っていったからと、珍しいということにはなりません。その分、ものすごくエネルギーと知恵が必要になります。いい物を作らないといけないし、それから、並居るライバルを押しつけて物を売って行く、その努力が必要だということです。

残念ながら、高知県の今の民間企業は、10年間くらい厳しい状況が続いているので、外に物を持って行って売れるような商品を開発する力や販路を開拓し、売り込みをかけるような力があるかという、必ずしもありません。だから、今、県庁と一緒に物を持って売ろう、そういう努力をしています。それが産業振興計画です。

もう1つあります。外からお客さんに来てもらい、高知県の中でお金を使ってもらおうという活動です。今、幸い、高知県は「土佐・龍馬であい博」、大河ドラマ「龍馬伝」のおかげで、たくさん、お客さんが来てくれて賑わっています。でも、来年以降どうなるかとか、今から考え始めないといけません。

今年は龍馬さんのおかげでたくさん観光客が来てくれましたが、来年以降どうするかといった時に、高知県のどういうところに、観光客が来てくれるかということを考えないといけません。大阪や東京の人は、旅先をどこにしようかと考えた時、全国でいろんな候補地があります。その中で、高知県を、室戸を選んでもらう理由がないといけません。

何で室戸に来てくれるか。何で高知に来てくれるか。今年は、坂本龍馬のドラマをやっているから高知に来てくれたかもしれません。来年以降もできるだけそういう流れを維持していきたいと思っています。しかし、いつまで龍馬のブームは続きません。なので、できるだけ、それぞれの地域で、全国の人々にも訴えることのできるような特色ある観光地づくりというのを目指さないといけないと思います。

室戸は、「610club（室戸クラブ）」の皆さんが一生懸命考えておられると思います。室戸ジオパークは、世界ジオパークを目指して取り組みを進めておられると思います。

そういうかたちで、全国の皆さんの心をつかむような取り組みを、是非進めなければいけないと思っています。

ただし、簡単なことではありません。いかに世界ジオパークだとしても、世界ジオパークは日本の中にもう3つも4つもある。室戸は海がきれいで魚がおいしいと言っても、海が大きくて美しく魚がおいしい場所が全国にたくさんあります。そういう中で、全国の人々があえて室戸を選ぶ理由をしっかりと考え出していけないと思いません。

【地域医療と福祉の取り組みについて】

福祉の課題については、この室戸も含めて、県内全域で医師の数が減っているということです。実は、高知県は、全国の中でも1人当たりの医師の数が、第3位ぐらいに多いんです。だけど、それは高知市の周辺に多いということ。室戸市などの東部とか西部とか、そういうところの医師の数は少なくて困っています。またもう1つは、若い医師の数が少ないということ。そしてもう1つは、ものすごく大変な手術をしなければいけない診療科の医師が少なくて困っているというのが、高知県の医療現場の現状です。

どうやって地域の医療を確保するかが、今、ものすごく大きな課題になっています。そのために、「高知医療再生機構」というのを作って、若い医師の腕を磨けるような設備をたくさん作って、若い医師達に全国から来てもらって勉強してもらおう。そして、高知に残ってもらおうという取り組みを進めたりしています。

そして、安芸・芸陽病院の建て替え。今度、新しい病院を作る予定ですが、そこを地域の医療に携わってくれる先生を養成する拠点病院にしようと、取り組みを進めています。また、ドクターヘリをもう一機導入し、2つのヘリコプターで高知県の東部地域と医療センターを結んで、何かあった時には、高知市から医師に来てもらおう、またはこちらから患者を運ぶという取り組みを進めていこうと考えているところです。

このような医師不足の問題とともに、特に高齢者の方の日々の暮らしをどうするかということも、高知県の福祉の現場では非常に大きな課題になっています。

高知県の中山間地域では、高齢者の独り暮らしというのがものすごく増えているんです。連れ合い（配偶者）を亡くしてお一人になった方や、障害のある方もいます。しかし、周りには、それを支えてくれる若い人がいない。高齢者の皆さんが孤立しているという状況が起こっている。残念ながら、家の中で倒れていても誰も気付かないということが、たくさん起こっているんです。こういう状況を、まず何とかしなければいけない。

さらに、交通手段がなくて困っているという状況もあります。買い物をしに行こうにも、交通手段がない。買い物に行けないからご飯を食べることができない。風邪で倒れていて伏せっけていても、誰も助けてくれないといったら、ものすごく大変でしょう。けれど、高知県では、こういう人の数がものすごく増えていて、大きな課題になっています。

普通は、こういう状況になると、民間の会社がいろいろな福祉サービスというのを提供してくれるようになります。けれど、残念ながら高知県の場合は、それがなかなかうまく

いきません。どうしてかというと、人の数が少ないので、サービスを提供しようにも、商売にならないからです。結果として、孤立した高齢者の方がそのまま放置されてしまっているということが、たくさん起こっています。それを何とか、県とかで、この福祉の取り組みを助けていきたいと、高知型福祉の推進を今、進めています。「あつたかふれあいセンター」の取り組み、さらには、地域見守り協定の取り組みなど、官のほうでいろいろ行って、高齢者の皆さんを支えていこうとしているところです。日々の暮らしに関わる問題、それぞれの生活を支えていくという問題ですから、ものすごく難しい課題です。でも、この分野ほど、若い人達の力が必要とされているところはないと思っています。

【教育改革の取り組みについて】

今、中学校とか小学校で学力の向上、体力の向上をはかっているところと、取り組んでいます。また、高校生の皆さんにも、それぞれの学校で、立派な社会人になれるような、特色ある教育を行っていくべく努力をしています。

【県庁の仕事について】

南海地震対策のために、堤防を設置したり、津波避難タワーを設置したり、さらには高速道路を整備をして、「命の道」を確保したり、また産業振興計画に貢献できるような道の整備をするなど、様々な仕事をしているのが、高知県庁ということになります。

普通、高知県庁の仕事というと、県職員、あとは県議会議員だけに関係する仕事のように思うかもしれませんが、実際に福祉や観光の仕事の担い手となるのは、地域の住民の皆様なのです。その中で皆さんのような若い人の力が、是非とも必要だと考えています。